



古今事考



特
利 5
2.829



特 門へ利5
番 2823
巻



世ふ教吏乃官ありて教舎れいゝぬゝ何れ
 この人やその藝ふむも精一常ふ
 いつゝをむじうゝらり實をとりよハ唯
 四乃時のうらりかりれふのゝをせ
 其餘の干差れふくハ皆虚なりと
 答明しとみゆゝ千四と詠名一
 舊田公羽先生乃門下ふ入り風雅の如也
 人志はふあふ吟よの多し一年

いさゝかう鹿よの曾我の持場と云ふ
角田川の島もあらずよと云ふ
涼しそぬより後近來平安の
餘風と云ふ今く降福瑞男不待諸と
ほらと申書入重垣ふいよしと云ふ
あつと申書入重垣ふいよしと云ふ
いさゝかう鹿よの曾我の持場と云ふ
保生のもうしめらうん地と云ふ

良醫酒もあはれと云ふも命めり
卯月九日の初音と申ふいと
おろりあつと申書の持場と云ふ
くわいさしゆあやふいと申ふあつと
硯の蓋と云ふいと申ふいと
田原
あつと申書の持場と云ふ
千四の
千四の

りか人此門は格致の年を志しき
文正のつこ追善れ句より集れり
よりこひあまふ序はく小所謂世と
文字をいつても當來法輪の縁ゆえし
一書かみ一書と邦のむれ反古堆す
やう世の親切の志は感し
あまふ一書はゆえのこ

推本芳室誌

亡師若水信士此

暮尔後々

蟬くも思ひあるが小御法は約 三蝶
標くもるが小落日まの雲 千前
八景此市の中かおさし出て 舊翁
くちやま雲もくありたり 席拾
月まのこる河幸ひ此細工の 永章
柄抱いて行ぬ後乃行乃 一水
山田守の會承をたも月勝子 尾長
小松乃の風り碓千軒 九橋

追悼

指南使此門をちるく風車 大立

十日のぬき 舟日吉可
舟日吉可

惜し 心外廿日と暮れ花をり 了雨

午刻 しのぶ無湯糸も世の塵牡丹 溪尾

涙の橋風もかき日傘うね 横花

席毎の息もむも六乃世を
二十日草とはあちき解しや

短歌乃のりももはひゆりて 木志

竹の子や鐘木の法のちまとの 一水

世少風ふおしや雲の巻に散り 雨江

短歌や其うし世の草は敷 袖帆

凡縁の草は世の口小鱈魚
しんてい

とくく美やわのそらら成りまき 徳夫

おしちあこと心餘もよや惜し 伊丹 蜂房

卯の毛やあらし 伊丹 同 文人

追悼

大乃行キ甚る妻れ以干山

桐磨

海福橋化老部類と何れも
長谷川千四も其一人ありて
年八五八の終と辨てを覚悟
卯月廿九卒とありて令下
此の不行道となりぬ世俗不
陰陽師身のことと云ひこのや
るし一書名を向意と云ふ人
後よ行し一知向と宝舟に積
きて歎妻はらり易適めり海の

ニルニバクシシ

妻れ和や



帆もゆ先地

村磨

追悼

此人や大毅の如く志が小地と
振る懐紙は月小八次ありと
なつめ七々り小壇の浦の如き
見えて年まぬ男と云ふは
卯月二十日此處と清ぬ残念々々
葉うこれやかして世の子小花山椒

菊巷
三
以

け人言曲は能きなりて常
奏より調りごとく惜し哉

常のぬゆや要乃花の音

吟枝

あゝ世を花の流追を能く

梁之

竹馬のなりみゆりゆふ

やまゆりゆふゆりや玉巻葛

花溪

おしやま谷川

かきんけと一声と大三重

三剛

追悼

二十年来は別業は討盡く

一寐覚月あは流氷やむすの地あ

尾長

とせ川千四のまはせの事

らゝしとて廣く懐きおその

化さつてぬあゝあゝ人の心

のこりて一海のなふと目を吊ぬ

をしましを教にせよとて木の

千鹿

敬語やちちふとまゝにぬ敷椿

管月

昔みししやまのや声化かとき次
永章

こね國へやんとし折あゆ筆子
蟻彦

折しやふいぬく人れ煙る那
左橘

とぬれ出ふ子ハ若葉の宿か
魚洞

彼や声ぬりしき致帳をいぬ
吉躬

いと日尾長のぬりし後おれ

千四の遊入海下に志記

念の毎たん人の懐むをいぬ
いとをいぬ
乳小飽くかざる勝ち
櫻美
白羽

追悼

その人よ似ぬも化たりや坊主
貞峨

うかたりし玉中の葛れ書か海
如形

奈乃汗干あひむらりなるまど
あひひ

也石川千四のぬりし病あふ

折あゆ筆活きしこのはと
思ひハ

世はあなれぬし道やや風車
青祇

西よの鳥あはまきのみせ郭公
一馬

時をこりり遠ひある郭公 麻竹

纏ほく世よそ物も所 風車 及川

一とせ此志まきこや人の竹目ま 文露

佐久間乃むうとふ所

いよも谷川をまきよれ地を

ふふふいむ

ア中れも存告る冥途れとふ 是來

短夜や甚るるやふ 旗を所 蛙文

ふららるるやまきれふ所は此の書 驪大

達人の筆尾に世に鏡にゆりて

短夜乃摸みふんゆえ乃そ及 万里

世を麦れ中とけ人秋を風 之由

よのひらるるやまきれ此の書 及瓜

ゆめりや林ぬのや京 鯨馬 風狸

ちも捨てくぬに玉巻芭蕉の那 紙魚

それらとよめお府の音すハ 吉丸

新始りまてふものも 齧の月 政磨

せりてそのそりか機関くも川草
 園磨
 あやせぬきいおの中書白丁花
 玉舟
 惜まねくその目やまの廿日竹
 柳水
 夢さくらや名のとめて花のこかこ
 席拾
 世よ其名自めて影やたりのよ
 守后
 出りぬやのこふあせれ花の雲
 宗輔
 んやあぬ名もさしたる多た入
 律荷
 りたし人の心あとの青き花
 丈之

閑心やひもきて雨ふらるる多多 塚 李 町
 一八乃丸らん地このそ梅梅 敬立
讚の三本松

追悼

虫のこほ一句や言葉此物知
 青房
 ねく小鼻うらうとて新葉花
 舊翁
 千万里四月櫻やむく人衣云
 晋中
 一しゆく硯まて干てかへる鳥
 家常

旅衣何罪ゆらん病ね感 山下 里虹

朝堂に若のこ強して雲の底 芳沢 春水

時まゝにひびくく蓮やたの七日 藤井 洞篁

散りしそ風ふゆるを百合花 藤川 茶谷

津より行遠みよ法の印もき次 藤川 逸風

おの思入にゆきし花も

こはゆい菩提を種

散芥子のたうゆきもまゝ 竹翁 基奎洞

解世とおもひも物成見

ゆりふをまやこさるみい

終くぬるもし

下り宮あやも暮元れ 裾拾 三蝶

人を所かしくんや影を模の突 不道 青花

死を何と地を名所のむい 不道 千前

世は尚壁眼も暮の候う那 如草

栗は花も長きこころれを傳ふ世 里彦

千四追善

由縁齋

貞柳

寂光此都ハ行々仰々祿々
と申ふ此の上瑞穂も所

やんらん年法志し〜んちちち
あふまの心のみ地をりり
り〜りあふみ日作主孫〜ん
いたふは〜れを〜孫よ知日

とんつ〜みらち〜め〜ちち
ゆり〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
あゆり〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
とん〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
とん〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

重保

ちりものゆをみりりゆれ〜ん
ねむ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

寄郭公哀傷

わがまはのつらき心もまたおぼ
さし給ふまのつらき心もまたおぼ

寄卯花哀傷

さうさうと世もなほさうさうと卯の花
地味乃ち雪やさうさうと卯の花

寄復月哀傷

くさくさの心もまたおぼさし給ふ
復月乃ち雪やさうさうと卯の花

